TOKYO HEADLINE 20th HISTORY

「TOKYO HEADLINE」は2002年に日本で初めての無料の日刊新聞としてスタートしてから今年で20周年を迎えます。当時の名前は「HEADLINE TODAY」。週刊化に伴い現在の名称に変更しました。その後、ウェブ配信の強化に伴い、隔週、月刊と発行サイクルを変更。今年からは年4回の季刊とし、日々のニュースはウェブでどんどん発信していきます。ということで、この20年の弊紙と日本を並行して振り返ってみました。

2002

HEADLINE TODAY はまずは6月3日から1週間、テスト版として発行。その時の1面はちょうど開幕したサッカーの日韓W杯。7月1日から本格的にスタートし、最初のうちは認知度を高めるために都内の主要駅を中心に手配りを敢行。多くの人が「これは何だ？」「何が始まったんだ？」という感じで手に取っていったそう。

創刊時から初代編集長の人脈の広さからジャーナリストの木村太郎氏、スポーツライターの青島健太氏にコラムを執筆していただくなど、異色の媒体として認知されるようになる。当初は日刊ゲンダイ、夕刊フジと同じ大きさのタブロイド判で紙質も「ザ・タ刊」といったものだった。しかし日刊は長く続かず、11月から週刊化。この時期は紙質も良くなり、インクで手が汚れることもなくなった。

週刊「TOKYO HEADLNE」vol.83（2002.11.25発行号）週刊化の第1号は当時人気絶頂だったベッカムが1面を飾った

「TOKYO HEADLNE」vol.100（2003.3.31発行号）

「TOKYO HEADLNE」vol.200（2005.4.18発行号）

2003

2003年は1990年代後半から始まった格闘技ブームが頂点に達したといっても過言ではない年。K-1系の「Dynamite!!」がTBS系、PRIDE系の「PRIDE男祭り」がフジテレビ系、そしてアントニオ猪木がプロデュースする「INOKI BOM-BA-YE」が日本テレビ系と大晦日に地上波3局で格闘技イベントが放送された。本紙ではまさかの猪木のインタビューに成功。一面でもその雄姿を見せてくれた。

この年は地上波デジタル放送開始。東海道新幹線「品川駅」開業。日本郵政公社が誕生という出来事もあった。

2004

この年は『冬のソナタ』をきっかけとした、いわゆる「韓流ブーム」のスタートとなる年。4月4日にはその主演俳優であるペ・ヨンジュンが初来日し、渋谷公会堂でファンミーティングを開催。ファンが大挙押し寄せたのはもちろんなのだが、メディアの受付にも記者とは思えない女性が大挙並んでいたことを思い出す。今から考えるとのどかな時代である。国内の主要メディアが集まる中、本紙カメラマンはくじ引きでなんと「1番」をゲット。フォトタイムのたびに横から舞台中央に走り、写真を撮っては戻るという動きを繰り返していたのだが、最前列のファンに「見えない！」と罵声を投げかけられながらの撮影だったという。

音楽界にもTOKYO HEADLINEがじわじわと浸透し始め、矢沢永吉、松任谷由実といった大物ミュージシャンのインタビューなどが紙面を飾った。またアテネ五輪時にはスポーツニュースに特化した「Special edition」を制作。秋には専門学校や一部の大学に配布した「TOKYO HEADLINE SCHOOL edition」を発行。これは2010年まで続いた。

2005

ヘッドラインでは独自のニュースとともに2002年の週刊化の際に産経新聞と記事配信契約を結んでいたのだが、この年はライブドアによるフジテレビへの敵対的買収問題が発生。産経新聞はいわずとしれたフジサンケイグループとあり、まさかの展開に固唾をのむ編集部。とりあえずは大きく体制が変わることはなくほっと胸をなでおろす。

4月に200号を発行。この年から映画配給会社GAGAの映画を一本丸ごと紹介する「GAGA HEADLINE」を発行。これは2011年まで続き、Vol.35まで続いた。同時期に「TOKYO HEADLINE entertainment edition」もスタートした。これはピザーラのピザの宅配に同封された。

「TOKYO HEADLINE」vol.400（2009.3.31発行号）

2006

2002年のサッカー日韓W杯からスタートしたヘッドラインにとって2度目のW杯。

「TOKYO HEADLNE」vol.300（2007.4.2発行号）

2007

4月に300号。農水省の食料自給率アップのための「フードアクションニッポン」と連携する形で「ファーミングプロジェクト」がスタート。『おいしいニッポンを』食べよう。』をテーマに冊子を作製。

2008

「ファーミングプロジェクト」の一環として千葉県に農園を開設。女優の黒谷友香が農作業に参加。

著名人がおすすめの食やお店を紹介しながら自らの仕事や食について語る「東京食道楽」の別版発行。

国際短編映画祭「SSFF & ASIA」のメディアパートナーになり号外がこの年からスタート。

「TOKYO HEADLNE」EXTRA EDITIONvol.2（2010.5.31発行号）

2009

3月に400号。

招致活動に携わった2016年夏季五輪で東京が落選。この年はその他にマイケル・ジャクソンが急死、民主党への政権交代、侍ジャパンがWBC連覇といった出来事があった。

2010

吉川晃司の連載コラム「SAMURAI ROCK」スタート。

大学生向けの「カレッジライン」がスタート。

「AKB48 TIMES」（2011.11発行）

2011

3月7日に500号。

その4日後に東日本大震災が発生。その後、長く続いた自粛ムードの中、広告が激減。会社存続の危機を迎えるが、減ページなどスリム化を図り再生。

人気絶頂のAKBのコンサート会場で「AKB48 TIMES」を販売。各チームごとに表紙を変え4つのバージョンを作成。好評を得る。

鈴木寛参議院議員（当時）、小池百合子衆議院議員（当時）、長島昭久衆議院議員の政治コラムがスタート。

9月15日には東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会が設立される。

「TOKYO HEADLNE」vol.500（2011.3.7発行号）

2012

2020年夏季五輪の東京招致に向けた活動を活発化させるため、ヘッドラインが招致委員会との橋渡し役となりEXILEが無償協力でポスター等に登場。本紙の1面とともに『広報東京都』の表紙も飾った。

EXILE TETSUYAの連載「DANCEの道」がスタート。

東日本大震災からの復興支援を目的に、「夢の課外授業」を主催する二十一世紀クラブ、文部科学省、LDH JAPANが組んだ「中学生 Rising Sun Project」がスタート。本紙はその活動を追うメディアに。

夏のロンドン五輪ではロンドンにある日本文化の情報発信拠点ジャパンハウスで日本語版の「TOKYO HEADLINE ロンドン2012パラリンピックedition」、英語版の「TOKYO HEADLINE 別版　ARIGATO HEADLINE」を作成。

横須賀の魅力を伝える冊子を発行。

2013

5月から隔週発行に。9月に600号。

TOKYO FMで「JAPAN MOVE UP supported by TOKYO HEADLINE」（土曜21時30分～）がスタート。

招致活動に携わった東京五輪の開催が9月のIOC総会で決定。

2014

黒田勇樹の「新」ハイパーメディア人生相談がウェブでスタート。

2020年に東京オリンピックの開催を控えた日本、そして東京をどんどん元気にしていくためのプロジェクト「TEAM2020」がスタート。

この年はSTAP細胞問題が連日、世間をにぎわせた。2月には東京都知事選挙で舛添要一氏が当選。3月には「笑っていいとも！」が最終回を迎えた。

スポーツ界では5月に新生K-1がスタート。9月に旗揚げ戦が行われた。

2015

SOD広報（当時）田口桃子氏の連載コラム「脱ごじらせへの道」がスタート。

10月8日にRIZINが設立会見を開き、12月29日と31日に大会を開催することを発表。前年の新生K-1と合わせ、格闘技関連の取材が一気に増える。

2016

リオデジャネイロパラリンピックの盛り上げの一環として「TOKYO HEADLINE NO LIMITS SPECIAL 大江戸ステーションスタジアム」を発行。ニコニコ超会議で「COLLEGE HEADLINE」配布。

小池百合子氏が女性初の東京都知事就任。

2017

9月から月刊化。11月に700号。

創業支援施設「Startup Hub Tokyo」とのコラボ企画が1月からスタート。

vol.700（2017.11.13発行号）

2018

GENERATIONS 小森隼のコラム【小森の小言】がウェブでスタート。

平成ノブシコブシ、徳井健太のコラム「徳井健太の菩薩目線」がウェブでスタート。

2019

若手起業家や企業経営者、アーティストらが集まり2020年以降の日本を元気にするために活動するプロジェクト「BEYOND 2020 NEXT FORUM」がスタート。

2020

初頭から新型コロナウイルスが蔓延。夏の東京オリンピック・パラリンピックの開催が危ぶまれる。結局、3月30日に1年間の延期が決定。

2021

世界の子どもたちが集まり、平和で豊かな世界についてみんなで表現し合い、語り合う“ピースコミュニケーション”の場として「第1回子ども未来国連会議」を3月27に世界最大級の屋内型ミニチュア・テーマパーク「SMALL WORLDS TOKYO」で開催。ボードメンバーにアーティストのMIYAVI、ジャーナリストの堀潤氏、中山泰秀防衛副大臣兼内閣府副大臣らが名を連ねる。

20年の間に培ったネットワークを活用し「SDGsピースコミュニケーションプロジェクト」を産学官のコンソーシアムにより推進して参ります

2002年に日本初のニュース付き日刊フリーペーパーとして「HEADLINE TODAY」発行を開始し、3カ月間で週刊化を条件に産経新聞社と業務提携を行い「TOKYO HEADLINE」として長らく週刊発行を続けて参りました。

ヨーロッパで主流であったニュース付きフリーペーパー「メトロ」をモデルに当時話題を提供し、2012年ロンドン五輪では日本の東京オリンピック招致活動の一環で、ロンドンにて英字版「TOKYO HEADLINE」を世界からの来場者に向けて発行もしました。

世の中のデジタル化の流れに沿って「TOKYO HEADLINE WEB」に注力し、連携配信先（Yahoo!、LINE、グノシーなど）を含めて月間ではありますが1000万PVまで進化してきました。

そしてコロナ禍でラックでの流通、スマートファンの普及によるデジタル情報利用の定着と共にフリーペーパーの役割も少なくなってきたこともありTOKYO HEADLINEを年4回の発行（春、夏、秋、冬）とし、テーマ特集号の随時発行に変更をさせて頂きます。

ヘッドライン社は今年で20周年を迎えます。この間に培った政治、芸能、スポーツ、文化といったさまざまな分野でのネットワークを活用し、旗振り役として活動してきた「BEYOND2020 NEXT FORUM」（内閣府認証事業）で、2020年以降の日本を活性化するプロジェクトを軸にソーシャルプランニング、ソーシャルプロジェクトの企画、運営、実施に取り組み、2022年はその中でも「こども未来国連会議」を含む「SDGsピースコミュニケーションプロジェクト」を産学官のコンソーシアムにより推進して参ります。

ヘッドライン社長
BEYONDO2020NEXT FORUM代表幹事
早稲田大学グローバル科学知融合研究所副所長
一木 広治